

# 関西鉄鋼の1年

A まずは今年の関西鉄鋼業界を振り返ろう。2 国内高炉・電炉・輸入材の流入により、市況は下落局面を迎えた。

B 関西では他地区に比べて輸入材比率が高く、輸入材の影響は強まっていて、特に熱延鋼板や普通線材、冷延ステンレス

A 東京製鉄が尼崎市にサテライトヤードを来年5月に開設する。やはりカーボンニュートラル（CN）に向けて、長期

A 年初に岸和田製鋼の火災事故があり製鋼が停止した。地区最大の供

度、省エネ・省CO<sub>2</sub>型産300万ト体制」構築された。電気炉設備「エコアーク」の導入。来年4〜6月を「ライト」を導入する。その他電炉メーカー各社も電気料金などエネルギーコストの高騰への対策を講じている。

E 二・三次流通業でも小ロット多品種に対応するための設備投資が実施されている。ねじ商社の

## 省人・省力設備を積極導入 物流問題 対策急ぐ

薄板は安価な輸入材に引張られて値下がりした。一方、仕入れソースが国内メーカーや一部の海外材に絞られている

的には鉄スクラップの需要は伸びて取り合いになるだろう。イオマスボイラーを設置して同工場のCO<sub>2</sub>排出量を従来に比べ20%強削減した。CN対応も

溶接機などをそろえ、Mを稼働させ、手溶接を主体に二・三次加工を強化している。また、山

ほとんど大きな値下がりはない。出商談も活気薄だった。A 新関西製鉄が24年秋頃、省エネ効果が期待

開ける次世代型製鋼用電源制御システム「Q-ON」を、大阪製鉄が25年

4月に東海などで増産を目指す東鉄のカラー（北九州市）を「トウテツコラム」の在庫流通はこれまで

A 国内高炉メーカーの販売政策により、品種によって価格は維持されて

るだろう。D 電力費の高騰が続いた省エネなどエネルギー関連の投資は今後も

さらに来年のホット生産再開の運賃エキストラ改定に



小ロット多品種の納品体制に磨きをかける信光ステンレスの立体自動倉庫

